

# 特集1

## 田山暦・南部絵暦

### ～天文学と生活とをつなぐ架け橋～

荒木田英禎（日本大学工学部）

#### 1. はじめに

今日、カレンダーや暦 [1] [2] [3] は生活に広く浸透した身近な存在であり、暦は毎年、国立天文台から刊行される礫要綱 [4] や暦象年表 [5] にもとづいて作成されている。

現在日本で用いられている暦は太陽暦であるが、明治5年までは太陰太陽暦を用いていた。後述するが、太陰太陽暦は太陽暦に比べて複雑で、暦を見なければその年の月の並びや閏月の有無などが分からず、生活や農業、政治、経済など多方面に大きな不便を生じた。それゆえ暦は大事なものであったのであるが、文字の読めない人の多かった時代に、絵と記号だけを用いて表した珍しい暦が南部藩（現在の岩手県周辺）に存在した。それが田山暦と南部（盛岡）絵暦である [6] [7] [8]。本稿ではこれらの暦を紹介し、その成り立ちや背景についても考えてみたい。

#### 2. 太陰太陽暦

日本で現在使われている太陽暦は太陽の動き、すなわち季節変化に則って作られているが、百済（朝鮮半島）から中国暦（漢暦）が伝わった7世紀から明治5年までは、月の運動（満ち欠け）をもとにした太陰太陽暦が用いられていた。太陰太陽暦は月が地球を1周する約29.5日の周期をもとに作られ、30日の大の月と29日の小の月で1年を表した。

しかし、これでは  $29.5 \text{ 日} \times 12 \text{ ヶ月} = 354 \text{ 日}$  となり、365日に11日足りず、このままでは季節と暦がずれていってしまう。このずれを2～3年に一度（19年に7回）閏月を挿入して調整していたが、二十四節気と中気を用いて季節のずれを勘案しながら挿入されたた

め、規則的に挿入されたわけではなかった。さらに、大の月と小の月の並びも年によって変わり、大大や小小のような並びが現れることもあった。これは、暦を作成する際、日蝕が1日（朔日）に、月蝕が15日（十五夜）になるようにしていたこと、そして、太陽（地球）や月の軌道の時間変化による影響である。

したがって、当時はその年の天体の動きを前もって計算しなければ暦が定められず、暦がなければ、人々はその年の月の大小の並びや閏月の有無、祭日や田植え、種まきなどの時期も分からない。このため、太陰太陽暦を用いていた頃は、暦は日々の生活を送るうえで必需品であったといえる。

#### 3. 田山暦・南部絵暦

かつては今以上に暦の重要性が大きかったわけだが、当時は文字を読めない人も多く、特に地方ではその傾向が強かった。文字の読めない人の多くは農民だったのであろうから、農作業の適切な時期を知らせなければ、作物の収穫に影響し、人々を養えなくなる。そこで、文字が読めなくても干支、月の大小、吉方位、祭日や農作業の目安などの事項が理解できるように作られたのが絵暦の田山暦や南部（盛岡）絵暦である。

##### 3.1 田山暦

田山暦は南部藩田山村（現在の岩手県八幡平市田山）で使われていた絵暦である。1711年頃には八幡善八（初代）により作成されていたと伝えられ、伊勢暦を手本とした折り畳まれた体裁を取り、絵と記号だけを用いて暦を表した。



図1 天明三年田山曆[9] (許可を得て掲載)

図1に天明三年(1783)の現存最古の田山曆を示す[9]。右側の第1折目は上から順番に、その年の恵方の方角を鳥居の記号で表し、その下は福德を表す四神の方角(黒丸の方角)で、その下は干支(卯年)である。兎の絵の下のざるのようなものは「とおし」という農具で、これで「年」と読ませた。

第2折目以降は1月から12月までの各月毎に暦注や事項がまとめられている。棒の本数で1月から4月を、5月が○、6月から9月までは○の中に棒を入れて表し、10月は○の中に十である。11月と12月は10月の記号に棒を加えて表す。月の大小は、ねじった紐を横に描き、紐の下側に書かれた月は小の月、紐が交わるところが大の月になる。よって、この年の月の並びは1月(小)、2月(大)、3月(小)、4月(大)、5月(大)、6月(小)、7月(大)、8月(小)、9月(大)、10月(小)、11月(大)、12月(小)であり、4月、5月と大の月が続いている。それぞれの月の上には、朔日を表す干支の絵が描かれている。

暦注や事項の日にちは、1の位を棒の数で、10の位を○の中に十の記号で表した。

暦注を見ると、月を表す記号のすぐ下には庚申(こうしん:神仏を祀り長寿を祈願した、猿の絵)や己巳(きし:弁財天の縁日、蛇の絵)といった信仰に関する内容が配置されている。その下に、節分(泣いた鬼)や種蒔よし(種壺)、入梅(梅の花)、田植えよし(苗の束)、彼岸の入り(団子5個)、刈入れよし(蠶の絵)、二百十日(百文の束2つと一文

銭10枚)、八十八夜(重箱と矢)などが配置される。下部に描かれる暦注は八専(はっせん:物事が偏る凶日、箸二つ)、十方暮(じっぽうくれ:万事に凶、十字に交わる棒)といった吉凶に関するものである。上段に信仰に関わる暦注が記されている点に留意されたい。

田山曆は当初、田山地区だけで頒布され、手書きで作成されていた。だが、次第に評判になり、近隣地区や盛岡にも広まったため、木活(スタンプ)化されて制作されるようになった。田山曆は江戸時代の終わりまで八幡家が代々作成していたが、明治初頭に、制作に必要な木活が半分ほど紛失してしまい、以来、発行が途絶えてしまった。

### 3.2 南部(盛岡)絵曆

田山曆の影響を受け、南部藩士の田口森蔭と奉行の川井鶴亭により南部(盛岡)絵曆が考案され、藩の御用印刷屋であった舞田屋が印刷し、南部藩全域で使われた。

南部(盛岡)絵曆は文化年間(1804~1818)にはすでに使われていたようだが、正確な発行開始年は不明である。この絵曆は広く流通させる目的があったため、当初から一枚の板木を用いて作成された。田山曆と同様に、絵と記号を用いて暦注などを表すほか、絵柄の発音を使って表す工夫もなされていた。

田山曆は月毎に暦注をまとめていたが、南部(盛岡)絵曆は暦注や事項毎にそれらが何月何日に当たるかというまとめ方であった。

図2に文化七年(1810)の南部(盛岡)絵曆を示す[6]。最上段は右から順番に元号、干支、年である。手紙(文)とくわで元号の「文化」と読ませる。牛の絵が描かれているので丑年、そしてサイコロの目の数で七年を表している。右側の大太刀の下にサイコロの目で大の月が、左側の小刀の下に小の月がまとめられている。左右の刀に挟まれたものは

三宝物珠を表す紋章で、その下に恵方、庚申（庚申塔）、甲子（こうし、大黒様の法要）と続く。最下段に絵で右から奥州盛岡生姜丁城前町舞田屋理作と署名されている。

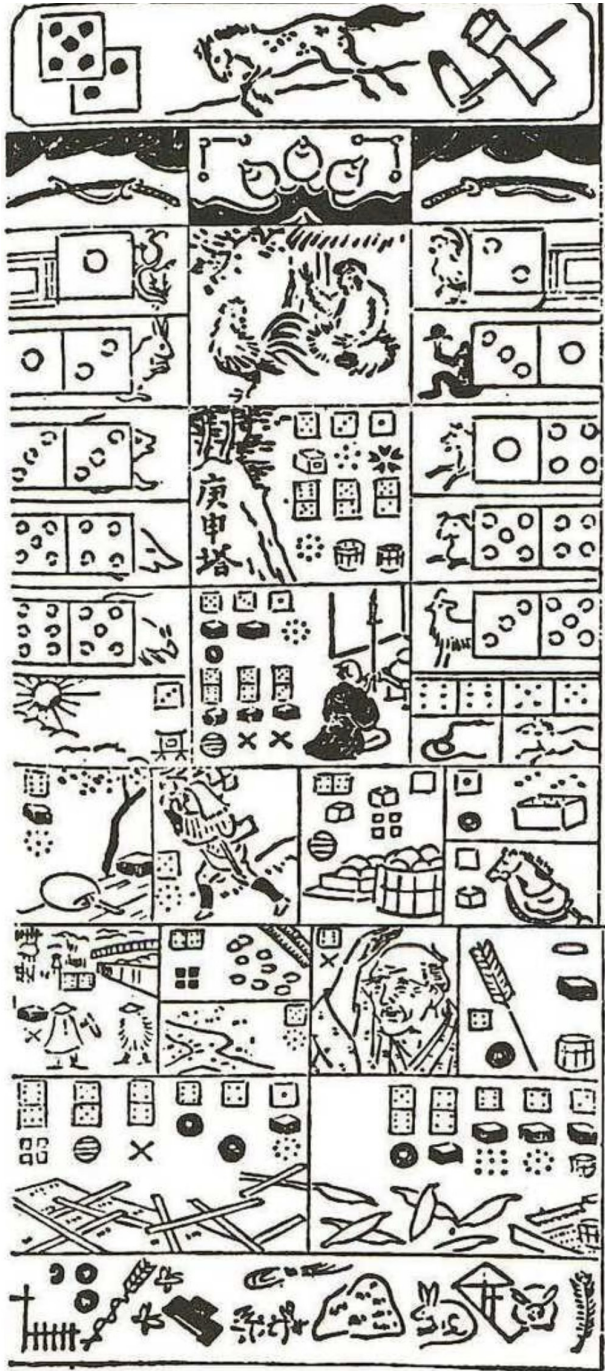


図2 文化七年南部（盛岡）絵暦[6]（許可を得て掲載）

暦注や事項の月日だが、月はサイコロ目の数で、日の表記は一文銭（1日）、×（2日）、

○に3本線（3日）、四角4つ（4日）、花びら5枚（5日）、6個の点（6日）、七輪（7日）、鉢（8日）、9個の点（9日）、重箱（10日）の組み合わせで表している。

暦注を見ていこう。左の小の月 11 月の下にある太陽が少し欠けた絵が日蝕（3月1日）である。1日の表記がないが、太陰太陽暦では日蝕は1日（朔日）に起こるように作られていたので、記載がなくても分かる。日蝕の下が縁側と団扇で土用（6月19日）、その右は盗賊が荷を奪っている（荷奪い）の絵で入梅（5月9日）。入梅の右は団子で彼岸（2月14日、8月13日）、その右の2つは上から節分（豆、1月1日）、下が初午（馬の玩具、2月10日）である。土用の下は寒の入り（寒参り、12月12日）で、その右の2つは上が台風シーズンの目安の二百十日（百文の束2つと一文銭10枚、8月4日）、下が田植吉（田んぼ、5月9日）である。その右が田植えの期限を表す半夏生（6月2日）で、禿げが生じるからきている。半夏生の右は霜の心配のなくなる目安の八十八夜（4月1日）で、鉢巻（鉢の書き損じかも知れない）、重箱、鉢、矢で表す。その下は左が十方暮（十本の棒）、右が八専である。鉢と、桶を作るときの道具の織（せん）で八専と読ませる。この暦では使われていないが、他にも五重塔（塔）と琴柱（ことじ）で冬至、稲刈りの絵で田刈吉などと表していた。

#### 4. 絵暦の生まれた背景

##### 4.1 田山暦

田山暦は南部藩田山村という辺境の地で誕生したが、その背後には天台宗と庚申信仰の2つが影響していると考えられる。

##### (1) 天台宗との関係

八幡善八は、元々中尊寺（天台宗）の住職であったが、上役の罪を被り中尊寺にいられ

なくなり、南部藩田山村に落ち延びた。当時、田山付近は出羽三山系天台宗の修験場であり、近くには天台宗の天台寺（岩手県二戸市浄法寺）がある。おそらく善八は天台宗のつてを頼りに田山に着いたものと思われる。そして住み着いた田山で八幡家に婿入りした。

善八は住職であったことから、書の読み書きや天文、暦に明るかったため、住民に暦や天候、農業などを指導する日知り（ひじり、聖）を務めた。そして、文字が読めない人でも心経を読めるように、住民の信仰の基盤であった般若心経を絵で表した絵心経を作成した。その後、住民の生活の窮状を救うため、絵暦を作成したものと考えられている。

## (2) 庚申信仰との関係

田山暦と庚申信仰の関わりを見ていきたい。田山暦の各月の上端に庚申や己巳といった信仰に関わる事項が書かれていたことを思い出して欲しい。これらが重視されたのは、当地が庚申信仰の盛んな地だったからだろう。

60日ごとの庚申の日（かのえさるのひ）には庚申講が行われた。庚申の日は、人間の体に住む三尸（さんし）が、人間が寝た後、天帝に悪事を伝えに飛び出し、その人は早死してしまうと信じられていた。そこで、三尸が飛び出さないように徹夜をして神仏を祀り、長寿を祈願したのが庚申講である。

この庚申講を3年18回行った証として作られる石碑が庚申塔であり（図3）、庚申信仰が盛んであった地域には今でも多く現存し、史跡や文化財に指定されているものもある。

田山暦は田植えや種蒔き、稲刈りといった農業の好機を知らせるばかりではなく、人々の信仰を支える意味でも重要で、実利と信仰の双方の面から住民に寄り添った暦だったといえる。そして、絵暦の頒布を通じて住民に資することで、天台宗の信者・檀家の獲得を

図ろうという意図も込められていたのだろう。



図3 宝永六年銘青面金剛庚申供養塔（岩手県一戸町）[10]（許可を得て掲載）

## 4.2 南部（盛岡）絵暦

先に述べたように南部（盛岡）絵暦の作成には南部藩士の田口森蔭と奉行を務めた川井鶴亭が関わり、南部藩御用達の印刷屋の舞田屋に印刷させ、流通させていた。このことから、南部（盛岡）絵暦はその作成から流通まで南部藩が大きく関与していたといえる。

### (1) 作成の背景

南部藩はやませの影響を受け、稲作には厳しい地域で、飢饉や凶作、不作に悩まされ、その回数は江戸時代を通じて約50回にも及ぶ。そもそも南部藩は藩の財政状況が芳しくなかった上に、不作、凶作によりさらに深刻な状況に陥ってしまうことも多かったのだろう。したがって、絵暦を通じて農作業の好機を農民に知らせ、石高向上に繋げたいという側面を持っていたと考えられる。実際に絵暦には田植え、八十八夜、半夏生、二百十日、稲刈りといった農業に密接に関連する暦注や事項が記載されている。

### (2) 幕府の規制を免れた南部絵暦

映画にもなった小説「天地明察」[11]でも

描かれているが、貞享2年(1685)に渋川春海(安井算哲)により初めて日本人による貞享暦法が確立した。この貞享の改暦以降、暦編纂は朝廷から幕府の手に移り、暦注などの記載内容も統一された。そして幕府は暦の出版を管理し、許可なく出版することを禁じた。徳川家康は大坂冬の陣・夏の陣を経て、1615年(慶長20年)に天下統一を果たし、日本の国土(空間)を治めることになるが、それから遅れること70年、織田信長でも成しえなかった暦(時間)編纂の実権を幕府はようやく手に入れたのである。

当時、南部藩では伊勢暦や会津暦が流通していたが、需要を十分賄うことができないこともあった。そして、幕末の動乱期には無許可で略暦や柱暦といった文字暦を舞田屋を通じて発行させた。

南部(盛岡)絵暦は、すでに幕府による暦の統制下にあった文化年間には作られていたのだが、なぜ、幕府のお咎めを受けずに江戸末期まで南部藩全域で用いることができたのか不思議である。当時、許可なく出版されたり、内容が幕府の官暦と異なる暦はもぐり暦(偽暦)として取り締られた。実際、仙台藩(伊達藩)は官暦にはない暦注を掲載したとして、暦の出版取り消し処分を受けた[12]。

南部(盛岡)絵暦が幕府のお咎めを受けなかった理由の一つ目として、流通が南部藩内に限られたことで、他藩の印刷業者の利権を侵害しなかったことが挙げられるだろう。

二つ目の理由として、南部(盛岡)絵暦の体裁に秘密があるのではないかと察せられる。図2を見ていただきたい。サイコロを用いたり、各暦注を双六などの遊具のような絵柄で描き、配置にも工夫を凝らして作られているように感じられないだろうか?日にちの表し方も田山暦より複雑な表記であり、入梅や冬至、半夏生などの描画は見ただけでは意味が分からず、暗号のようでもある。

さらに、暦の使い勝手の良さからいえば、田山暦のように各月ごとに暦注がまとめられているほうが便利はずである。だが、そうはせず、各暦注や事項毎に該当する月日をまとめる形を取っているのである。

これらのことから、南部(盛岡)絵暦は一見ただけではそれが暦と悟られないように、そして偽暦の疑いを免れるように巧妙にデザインされて出版された可能性はないだろうか?南部藩の願いとしては、何とかして文字の読めない農民の生産性を上げたい、藩の財政を立て直したいという切実な事情が反映しているのかも知れない。

南部(盛岡)絵暦が江戸末期まで出版を続けることができた理由について、適切な資料に辿り着くことができなかった。さらに資料収集を行い、背景を明らかにしていきたい。

#### 4.3 絵暦を紹介した書物

絵暦は国内だけではなく世界的にも珍しい暦である。特に田山暦は、江戸時代に田山を訪ねた作家の書物などにより知られるようになった。例えば、以下の書物である:

- 菅江真澄: けふのせはのゝ、凡国異器
- 百井塘雨: 笈埃随筆
- 橋南谿: 東遊記後編
- シーボルト: NIPPON
- 松浦武四郎: 鹿角日誌
- 山片蟠桃: 夢之代
- 上山広崇: 万延申歳両鹿角扈従日記

シーボルトは田山暦の実物ではなく、橋南谿の東遊記後編から引用しているようである。

田山暦が多くの書物で紹介されているのに対して、南部(盛岡)絵暦を紹介したものは極めて少ない。松浦武四郎が鹿角日誌で触れている程度である。南部(盛岡)絵暦の流通が南部藩内に限られたことも一因ではあろうが、田山暦との認知の格差を感じてしまう。

田山暦を海外に紹介したシーボルトの帰国

は 1828 年だが、南部（盛岡）絵暦は 1818 年にはすでに出版されており、なぜシーボルトが触れていないのかも少々不思議である。

## 5. おわりに

本稿では、国内だけではなく世界的にも珍しい田山暦、南部（盛岡）絵暦といった絵暦を紹介し、発行されるようになった背景などを考えてきた。すでに触れたように、太陰太陽暦は、その年の月の並びや閏月の挿入などをあらかじめ計算によって定めなければならなかったから、暦がなければ日常に不便を生じた。したがって、天文学は暦を介して人々の生活に密接に関わっていたと言える。

当時、紙は貴重であったため、使い終わった古暦は他の目的で再利用されたりしたため、現存する絵暦は少ない。だが、近年でも時々新たな絵暦が見つかっている（例えば [13]）。絵暦をさらに調べることで、天文学が暦の形で民俗学的側面にどのように関わり、影響を与えてきたのか明らかになり、天文文化研究に新たなページが書き加えられることを期待したい。

## 謝 辞

本稿の執筆に際し、田山暦の画像使用（図 1）を許可してくださった岩手県立博物館、南部（盛岡）絵暦の画像使用（図 2）を許可してくださった法政大学出版局、庚申塔（宝永六年銘青面金剛庚申供養塔）の画像使用（図 3）を許可してくださった岩手県一戸町教育委員会に心より感謝の意を表したい。

## 文 献

- [1] 青木信仰（2013）「新装版 時と暦」、東京大学出版会。  
 [2] 片山真人（2012）「暦の科学」、ベレ出版。

- [3] 石原幸男（2011）「暦はエレガントな科学 二十四節気と日本人」、PHP 研究所。  
 [4] 自然科学研究機構国立天文台彙要綱 HP <https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/yoko/>  
 [5] 自然科学研究機構国立天文台暦象年表 HP <https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/cande/>  
 [6] 岡田芳朗（1980）「南部絵暦」、法政大学出版局。  
 [7] 岡田芳朗（2004）「南部絵暦を読む」、大修館書店。  
 [8] 工藤紘一（2004）「田山暦・盛岡暦を読む」、熊谷印刷出版部。  
 [9] 瀬川修（2014）「天明三年田山暦の蛇足庵本版と岩手県博本版の違いについて」、岩手県立博物館研究報告，31：57。  
 [10] 岩手県一戸町 宝永六年銘青面金剛庚申供養塔 <https://www.town.ichinohe.iwate.jp/soshikikarasagasu/sekaiisanka/bunkazaikakari/1/04/3494.html>  
 [11] 冲方丁（2009）「天地明察」、角川書店。  
 [12] 国立国会図書館 日本全国の地方暦 その 2 <https://www.ndl.go.jp/koyomi/chapter2/s3.html>  
 [13] 岩手県一戸町 嘉永七年盛岡暦 <https://www.town.ichinohe.iwate.jp/soshikikarasagasu/sekaiisanka/bunkazaikakari/1/04/2985.html>



荒木田 英禎